

台湾語における文字使用と言語イデオロギー

—「台湾意識」をめぐる—

吉田真悟（一橋大学大学院生／日本学術振興会）

1. 研究の背景と目的

台湾語¹は従来台湾における多数派の母語であったが、日本語から中国語²へと移り変わった2つの国語の下で、長年に亘り使用が私的領域に限定されてきた結果、現在では世代間継承が危ぶまれており、言語復興運動が盛んになっている。その中で焦点の一つとなったのが正書法の問題であり、現在の台湾語文には大きく分けて、漢字のみで書かれる「全漢」、ローマ字のみで書かれる「全羅」、そして漢字ローマ字交じりで書かれる「漢羅」という3つの形態が存在する。

このように書記言語形成の只中にある台湾語について、発表者は様々な書記媒体における文字使用を調査しており、その結果漢字とローマ字それぞれにおいて、教育部（文部省に相当）が公表した規範を軸とした標準化の動きが見られる一方で、文字種を選択や配分に関しては、いまだ多様性が大きいことが明らかになってきた。このような規範化と多様性の背後にある仕組みを解明するためには、テキストの分析だけではなく、書き手の言語や文字に対する意識、思想といった、行為主体側の要因も分析する必要があると考えられる。本発表ではそれを「言語イデオロギー」³として捉え、その中でも特に「ナショナルアイデンティティ国族認同」に関わるイデオロギーである「台湾意識」に焦点を当て、それが台湾語を書く際の文字使用とどのように関わっているかについて論じる。

2. 先行研究

台湾語の書き言葉に対する読者の意識や態度を調査した研究として張學謙(2003)、また台湾語文の書き手に対するインタビューとして、楊允言他編(2008)がある。張學謙(2003)が将来の台湾語書き言葉に対する言語政策を見据えて、一般の読者に焦点を当てたのに対し、本発表は現在の状況の記述を目的としており、現時点で台湾語による読み書きが一般に普及しているとは言い難い⁴ことから、テキストの書き手を中心とした言語イデオロギーに焦点を当てることとした。また、楊允言他編(2008)はインタビュー結果に対する分析は行っており、本発表ではそこに「言語イデオロギー」の概念を導入し、考察を加えることを試みる。

¹ シナ・チベット語族シナ語派（漢語）の閩南語（閩南方言）の内、主に台湾で使用されている下位変種。他に「台湾閩南語」や「福佬（ホーロー）語」等様々に呼称されるが、本発表では「台湾語」で統一する。

² 本発表においては、北京方言を基礎とした標準中国語を指すこととする。

³ この概念はSilverstein(1979)によって提起されて以来、様々な意味や文脈で使われているが、本発表では、「個人や集団の中で意識的または無意識に抱かれる、言語に関する思想や考え方」と定義する。広い定義を採用することにより、できる限り多くの対象を捉えるとともに、「イデオロギー」を否定的な意味の伴わない中立的な用語として用いることで、考え方の「正しさ」や文字の優劣に関する論争からは距離を取り、文字使用の背後にある意識を客観的に記述することを企図している。

⁴ 台湾では、台湾語で読み書きをすることは未だ一般的ではない。2001年から台湾語を含む「本土言語」が小学校の必修科目となっているが、表記法の混乱や時間数の少なさ（週1時限）から、本格的な読み書き教育の有無やその効果については、検証の余地がある。

3. 調査方法

言語イデオロギーを探るための方法として半構造化面接（インタビュー）を使用し、台湾語の書記や文字に関して、調査協力（被調査）者の考えを訊いていった。インタビュー時間は1人1～2時間を目安とし、主な使用言語は台湾語及び中国語である。これまでにインタビューを行った9名の内、本発表で言及するのは以下の6名であり、何れも台湾語で文章創作を行い、単著を持つ人物である⁵。

表1：面接調査協力者

氏名	面接日	面接時年齢	性別	職業	代表作品	文字使用の傾向
陳明仁	2018年8月10日	63歳	男	作家	Pha荒e故事（散文集）	全羅～全面漢羅
蔣為文	2018年8月11日	46歳	男	大学教授	喙講台語・手寫台文 台語文的台灣文學講座（論文集）	全羅～全面漢羅
呂美親	2018年8月13日	39歳	女	大学講師	落雨彼日（詩集）	全面漢羅～限定漢羅
劉承賢	2018年8月13日	43歳	男	大学講師	翻身・番身（小説）	全漢～限定漢羅～全面漢羅～全羅
陳金順	2019年2月16日	52歳	男	台湾語教師	Formosa時空演義（小説集）	全漢～限定漢羅～全面漢羅
林央敏	2019年3月12日	63歳	男	教師	胭脂淚（長編詩）	全漢

4. 漢字／ローマ字の選択と台湾意識

台湾では1980年代前半に、「台湾意識」と「中国意識」をめぐる論争が繰り広げられた（蕭阿勤 2012：180-184）。この問題は究極的に「^{ナショナルアイデンティティ}国族認同として台湾人と中国人のどちらを自認するか」という問いへと繋がり、現在に至るまで台湾社会・政治にとって主要な争点であり続けている⁶。こうした民族主義と台湾語の文字使用の関係について蕭阿勤は、日本統治時代の台湾語書記化の試みのほとんどが漢字によるものだったことは、「1930年代の提唱者はまだかなり強烈な漢文化意識を抱いていた」からであるとし、一方で「80年代末以来台湾語で書くことを主張した提唱者は、ほとんど例外無く台湾民族主義者である」ため、現代の台湾語文創作ではローマ字が多用されるようになってきていると述べている（ibid.：263-264）。それに対して Klöter は、日本時代には漢字以外の文字という選択肢が、そもそもあまり議論の対象になっていなかったことや、現代の漢字による台湾語辞書の編纂者にも台湾民族主義者が多く見られることから、漢字とローマ字の選択を単純に中国民族主義か台湾民族主義かの違いに帰することはできない、と主張している（Klöter 2005：195）。

これらの指摘の通り、現代台湾語文の書き手の多くが台湾民族主義ないし台湾意識を強く有しているとするならば、上述したように文字種の選択が依然多様であることの原因は、どのように説明できるだろうか。この問いに対して当初立てていた予想は、「台湾的なもの」として想像される範囲の差異である。即ちローマ字の多用が、漢字を中国（語）に属するものとして排除するイデオロギーと結び付いているのに対して、漢字を台湾（語）の一部と考え、寧ろローマ字を外来のものとして排除するイデオロギーが、漢字多用の背景に存在するのではないか、ということである。

この問題について面接調査では、まず台湾意識は確かに幅広い書き手に見られた。陳明仁氏の、「私にとってはね、要は、「台湾国」というものを持つことが、何よりも重要なんだ」（陳明仁① 00:06-00:13）⁷という発言

⁵ 表中「文字使用の傾向」の欄は、筆者が確認できた限りにおいて、協力者の書いた台湾語のテキスト（私信やSNS上の文章も含む）を基に判断したものである。

⁶ 政治大学が行っている世論調査では、自分を台湾人と考える人が、中国人及び両方と考える人を2008年以降一貫して上回っており、2019年6月時点で台湾人56.9%、中国人3.6%、両方36.5%となっている（政治大學選舉研究中心）。

⁷ 以下インタビューの引用・抜粋において、通常の字体は台湾語、斜字体は中国語、太字は日本語による発話を表す。また括弧内には、調査協力者（録音が複数ファイルに分かれた場合は通し番号も）と録音ファイル内の該当時間を表示する。

は、その最も明快な表現である。呂美親氏や劉承賢氏ら比較的若い世代からは、1990年代後半から2000年にかけての民主化や政権交代といった社会背景の下で、アイデンティティの転換があったとの語りが聞かれた。

そして一部の書き手においては、漢字を中国的なものとして排除する意識がローマ字の多用に繋がるのも、予想された通りであった。台湾ローマ字協会の理事長も務めた蔣為文氏はローマ字を推す理由を、台湾の「文化の主体性への考慮」であり、漢字を捨てて「中国と決別するため」と述べている(蔣為文 15:55-17:11)。

しかし、逆に漢字の使用に関しては、ローマ字を外来的のものとして排除、もしくは漢字を積極的に台湾的なものと見做して執着する意識は、あまり見られなかった。例えば現在は主に全漢で創作を行っている林央敏氏や陳金順氏は、以前はローマ字も用いており、今でもローマ字に反対しているわけではないと言う。ただ台湾の一般大衆は漢字に慣れているために、ローマ字には抵抗感や困難さが付き纏うことから、「本来それ〔文字〕は言語を記録するものに過ぎないのに、それを排斥する余り、言語も受け入れなくなる。それでは却って台湾語復興の妨げになってしまう」(林央敏 34:12-34:58)と述べており、言語の復興という目的を達するために、文字については漢字が支配的な社会の現実と折り合う選択をしたものと解釈できる。

主に漢羅で書いている呂美親氏の場合、漢字により積極的な評価を与えているが、それも漢字がローマ字より本質的に台湾的だから、という理由ではない。氏も以前は漢字を廃止すべきとの立場であったが、日本へ留学した経験が一つの契機となり、漢字はアジア共通の「文化資本」と考えるようになったと言ひ、台湾語と漢字の関係について以下のように語っている。

呂美親：それから次に、台湾は畢竟漢字社会で、私はそれは否定できない点だと思います。だからもし全部…漢字の簡単な所は、少なくとも〔台湾語文が〕今まだ普及していない時に、もしそれ〔漢字〕があれば良くないですか？より親近感が湧きますよね。一般の人でも排斥しないでしょう。今現在の社会でもしローマ字を見ても、なんじゃこりやって感じで。

発表者：慣れていないですよ。

呂美親：そう。だから良い文化的繋がりじゃないかと思ひます。単に(～ではなくて)…文化的繋がりと言ったのは、台湾人の文化的繋がりのことです。それは必ずしも中国と…中国と関係があるかどうかは、私にとっては重要じゃありません。漢字は畢竟台湾に長いことあって、台湾人共通の想像、想像の共同体における一つの要素となっている。それもだから漢字の利点の一つだと思います。

(呂美親 21:16-22:13)

呂美親：あとそれは一つの記号に過ぎない。私達が今広めたい、もしくは救いたいのは台湾語であって、その記号じゃありません。問題なのは記号に固執していると、ずっと、止まってるんじゃない⁹。

発表者：文字は言語にとっての道具、という考え方ですね。

呂美親：そうそう。本当は勿論、言語…文字は単なる道具じゃありません。だけど、やっぱり道具でもあるわけで。文字は道具以上のものであり得ますよ。愛着とか、アイデンティティとか。だけどそれはまた、一つの道具でもあり得るわけですよ。もし自分の言語がずっと受け継がれていって欲しいなら、言語がより大事でしょう？記号なんかは標準化できて、広めていけばええよ、それが一番大事な事です。

(呂美親 23:38-24:25)

⁸ アンダーソン(2007)が、ネイション(nation)とナショナリズム(nationalism)の形成を説明する際に使用した概念。

⁹ 台湾語運動が停滞している、という意味だと思われる。

ここまで言及した 6 名の書き手は、明示的な形で台湾意識を有しており、それが台湾語文創作と関連付けられている点、またローマ字を使用した経験があり、それに対する拒否感も持っていない点において、概ね皆共通している。そして一部の書き手については、漢字を中国的なものに見做すイデオロギーと、そこから徹底的に離れようとする戦略が、ローマ字志向を生成する一因となっている。一方漢字の使用については、文字そのものを台湾（或いは中国）と結び付けるイデオロギーと言うよりも、台湾語の読み書きの普及を優先するために、台湾人が漢字に馴染んでいる現実と妥協する、またはそれを利用するという側面が大きいようである。

5. 総括と展望

本発表で取り上げた台湾語の書き手に関する限り、漢字かローマ字かの選択は、少なくとも中国意識か台湾意識かの違いによるものではなく、台湾意識を前提とした上で、台湾の「主体性」を追求する過程で採る戦略の違いによるものと考えられる。つまり、中国的なものとして徹底的に距離を取る戦略がローマ字志向を生み、それよりも言語そのものの生き残り、即ち言語復興を優先する戦略が漢字の使用に繋がる、ということである。

ここで論じた 6 名の書き手は、何れも言語運動家と呼び得る人物であり、文学作品の創作や雑誌の刊行に携わっている。一方こうした民間の出版物と比べて、台湾語の学校教科書における文字使用にはより強い全漢志向が見られ、そこには本発表で見たものとは異なる言語イデオロギーが働いている可能性がある。今後はそうした文字の公的規範に纏わるイデオロギーも射程に入れて、台湾語の文字使用における多様性と規範形成の全貌を明らかにしていきたい。それにより、少数言語にとって読み書きとは何であるか、その意味を探る手掛かりが得られることが期待される。

謝辞

面接調査に御協力頂いた方々に、この場を借りて感謝申し上げます。また本発表は、台湾奨助金 MOFATF20190057、及び JSPS 科研費 19J10239 の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- アンダーソン, ベネディクト (2007). 白石隆・白石さや訳 定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行
書籍工房早山
- Klöter, Henning (2005). *Written Taiwanese*. Harrassowitz Verlag.
- Silverstein, Michael (1979). Language Structure and Linguistic Ideology. Paul R. Clyne et al. ed.
The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels. Chicago Linguistic Society: 193-247.
- 蕭阿勤 (2012). 重構台灣—當代民族主義的文化政治 聯經出版
- 楊允言・張學謙・呂美親編 (2008). 台語文運動 訪談暨史料彙編 國史館
- 張學謙 (2003). 行向多文字e台語文—文字態度 kap 政策論文集 睿煜出版
- 政治大學選舉研究中心 臺灣民眾臺灣人／中國人認同趨勢分布 (1992年06月～2016年06月) (<http://esc.nccu.edu.tw/app/news.php?Sn=166> 2020/1/6 閲覧)